

e-dream-s 通信

No. 133 発行：2012年6月10日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

目次

1. 第40回理事会に向けて	中川 房代	p. 2
2. テレビ→ラジオ	辻 荘一	p. 4
3. アメリカン・ドリームの裏切り？	井川 好二	p. 6
4. つながる世界	塚本 美紀	p. 13



遊歩道沿いに咲く紫陽花（東京都狛江市）

第 40 回理事会に向けて

中 川 房 代

6 月に入り、梅雨の季節となった。

湿度が多いのは過ごしにくいし、傘やカッパが必要で面倒なことはあるが、私はこの季節が嫌いではない。雨に濡れながら様々な色や表情で咲く紫陽花を見ると、懐かしさとともに、心が洗われる気がして何だかほっとする。

小学校 1 年のこの時期に庭に咲いていた紫陽花について書いた日記の文章を担当の先生に褒められたこと、3 年生の時に描いた傘をさす人の絵が校内の賞に入って初めて賞状をもらったこと、高校時代親友と二人でよく傘をさしながら紫陽花を眺めているろんな話をしたことなど、嬉しさや楽しさの感情と共に思い出すことが多いのがその理由かもしれない。・・・それにしても、紫陽花には雨が似合うなと思う。

そんな私の梅雨のイベントに 12 年前から e-dream-s 理事会も加わっている。今年は 6 月 23 日～24 日に神戸で開催する。事業年度替わりの節目となる毎年恒例の理事会である。

5 月のカンボジア訪問を受け、昨年からの「教科書支援プロジェクト」に加え、今年度は「リスニング教材支援プロジェクト」を進めることになっている。英語のリスニング教材を教室で使うための CD・カセットテープレコーダー 6 台は既にカンボジア・プノンペン郊外の Batheuy School にあり、10 月に始まる新学期から使用できるよう、電源である車のバッテリー 6 台を 9 月に購入予定である。教科書支援については、生徒数が分かり次第、8 月中には発注を完了することになる。

今後、この 2 つのプロジェクトの支援金を集めていくことになるのだが、昨年度よりも広く支援を呼びかけていきたいと考えている。理事会に向け、効果的で具体的な方法を論議していきたい。

Ponlue さん、3 月に 2 年間の留学を終えて帰国した Sokhom 理事も、現地でいろいろと連絡や折衝を進めてくださっている。インターネットや e メール、携帯電話があるおかげで、日本とカンボジアの間の連絡も便利になって、プロジェクトも進めやすくなっている。今回、広島在住の Akhara さんも理事会に参加する予定で、また Sokhom 理事の後輩のカンボジア人の友人が、私たちが集めた支援金をカンボジアまで持って行ってくださることになるなど、協力の輪も広がっている。この繋がりも大切にしていきたい。

さあ、皆さんの力で、第 40 回理事会を成功させましょう。

e-dream-s 第 40 回理事会

日時： 6月23日（土）15:00-17:00
6月24日（日） 9:00-12:00
会場： 神戸青少年会館
（神戸市中央区雲井通 5-1-2 神戸勤労会館 6階）
案件： 2011年度事業総括、及び収支決算
2012年度事業方針、及び予算 他

テレビ→ラジオ

辻莊一

自分が毎年年をとっても相手は常に高校生という職業上、高校生が何に興味があるかということには、注意を払ってきた。と書けばなんだかかっこよく聞こえるが、つまりそれは AKB48 の総選挙のことやメンバーの名前を知っていたり、お笑い芸人で誰が人気があるかに詳しいということだったりして、57歳男性としてどうよ、ということでもあるのだが取り敢えず、テレビは常にチェックしてきた。その番組自体に興味がなくとも取り敢えず情報収集としてテレビは見るというのが、ここ30年の習慣だった。もちろん好きで見ていた番組もたくさんあって、「オレたちひょうきん族」とか「タモリの音楽は世界だ！」などはそのために急いで家に帰って見るほどだった。

しかしここ数ヶ月、テレビを見る時間が減ってきている。長期にわたる聴取率やスポンサーの減少という産業としてのテレビの凋落、そしてその原因なのか結果なのか分からないが、どのチャンネルを見ても、グルメ番組とひな壇芸人を並べてのバラエティばかりという状況に代表される内容の空疎化が、自分にとって臨界点を越えたということかもしれない。あるいは単に、年を取って関心の傾向が変わったり、高校生の関心事項を知ろうとする情熱が薄れているのかもしれないが。

原因はともかく、今さらながらテレビ離れをしつつあるのだが、もちろん全く見ないわけではない。天気予報やニュースなど最低限の番組は見る、というかテレビがついている。見る時間が減ったのは夕食時である。我が家の夕食は早くて8時、遅いと10時ごろなのだが取り敢えずテレビはついている、というのが普段の状況だったのが、テレビを消してしまうことが多くなった。本当に見るテレビがなくなったのである。

しかし長年の習慣でテレビがついていないと寂しい。それで何をしているかというと、過去のテレビドラマやアニメで評判の良いものを借りてきて DVD や YouTube で見ているのである。ちなみに最近のおすすめはドラマなら「タイガー&ドラゴン」、アニメは「電脳コイル」である。

また、テレビを見なくなったと同時にラジオを聴くようになった。正確には Podcast や YouTube からダウンロードした音声を聴くようになった。ラジオは多分に生活習慣と結びついていて、この時間には車の運転をしているからいつもこの番組を聞くとかいう形になるのだが、宮仕えの身ではラジオを聴く時間は限られている。その時に好みの番組をやっているとは限らないので、ラジオを聴ける時間には、自分の iPhone に入っている大量の音楽をシャッフルでラジオ番組のように聴くというのが習慣だったのだが、今は Podcast で聴きたい番組を聴きたい時に聞けるうえに、最近ラジオにコラムや対談もので結構面白いものがあると気づいてからは、よく聴くようになった。最近のおすすめは「町山智浩のアメリカ映画特電」と「Naturally Mind/Brain」である。前者はタイトルとは違って、アメリカ映画とは限らないのだが映画の解説と評論、後者は言語学者によるチョムスキー理論の解説である。

こうして書いてみるとテレビから Podcast へ関心が移った理由が分かった気がする。紹介したドラマ・アニメ・Podcast からはどれも作り手が自分の情熱やこだわりをもつものを作っている、あるいは語っていることが伝わってくる。翻って、テレビ番組からは、私がかつて「オレたちひょうきん族」や「タモリの音楽は世界だ！」に感じていた作り手の情熱を感じなくなっているということなのかもしれない。

アメリカン・ドリーム の裏切り？

井川 好二



*West Side Story: America*¹

アメリカ社会の特徴の一つは、変化である。

様々な文化的背景を持った人たちが、次々と流入するアメリカでは、常にその多様性が新たに再定義されていく。

そういう意味で、アメリカの特徴は変化なのである。

そして、アメリカが現在、世界で唯一の「文明」であるため、アメリカの変化は、順々に各国へと波及するのである。ちなみに、司馬遼太郎によると、「文明」とは：

文明は「たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもの

¹ http://yaplog.jp/cv/schwarzwalder/img/19/west-side-story-0903-pp06_p.jpg

で、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的ではない。(司馬遼太郎, 1986, p. 17)²

司馬はまた、文明とは「便利なもの」「イカすもの」とも云う。

大きく変化しつつある最近のアメリカを考えてみたい。その変化の先にあるものも、新しい「アメリカ」であるからである。

1961 年度のアカデミー賞を 10 部門で受賞したハリウッド映画は、ミュージカル『ウエスト・サイド物語³』である。マンハッタンで対立するチンピラグループ (The Jets vs. the Sharks) の抗争と、悲劇の恋に堕ちる若いふたりの純情を描いたドラマ。プロットがシェークスピアの『ロミオとジュリエット⁴』を下敷きに行っていることは、よく知られている。

『ウエスト・サイド物語』が描くマンハッタンで対立するグループは、それぞれイタリア系移民のジェット団とプエルトリコ系移民のシャーク団。単なるチンピラグループの抗争ではなく、最下層で生存を賭けて闘う民族グループの姿が描かれている。

プエルトリコ・グループの男女が、歌って踊る曲に、有名な“America”がある。歌詞の主な部分は以下の通りである。

ANITA

Puerto Rico / My heart's devotion

Let it sink back in the ocean / Always the hurricanes blowing

Always the population growing / And the money owing

And the sunlight streaming / And the natives steaming

I like the island Manhattan / Smoke on your pipe

And put that in!⁵

シャーク団のリーダー、ベルナルド(George Chakiris⁶)の恋人、アニタが歌う。女たちは、いつもハ

² 司馬遼太郎(1986)「アメリカ素描」東京：新潮社

³ West Side Story n. 「ウエストサイド物語」《Broadway ミュージカル(初演 1957); Romeo and Juliet の筋書を New York のスラム街に移してミュージカル化したもの; Leonard Bernstein 作曲; 映画化(1961)》.[新英和大辞典第6版]

⁴ Romeo and Juliet『ロメオとジュリエット』《Shakespeare の悲劇; 創作は 1594 - 95 年ごろ, Good Quarto 出版は 1599 年, 上演は 1595 - 96 年ごろ; 仇敵同士の Montague 家と Capulet 家の, 公子 Romeo と公女 Juliet の恋愛悲劇》

[株式会社研究社 リーダーズ+プラス V2]

⁵ “Put that in your pipe and smoke it!”

Explanation: it means that the person spoken to should take good notice of what has been said and act on it, think about it, etc.

http://www.proz.com/kudoz/English/cinema_film_tv_drama/812508-smoke_on_your_pipe_and_put_that_in.html

⁶ チャキリス George Chakiris (1933 -) 《米国の俳優・歌手・ダンサー; ギリシア系; Gentlemen

リケーンが吹き荒れて、貧乏で、太陽ギラギラの故郷のプエルトリコに戻る気はない。マンハッタンが好き。

GIRLS

I like to be in America / Okay by me in America / Everything free in America

BERNARDO: For a small fee in America

ANITA: Buying on credit is so nice

BERNARDO: One look at us and they charge twice

ROSALIA: I have my own washing machine

INDIO: What will you have not to keep clean?

ANITA: Skyscrapers bloom in America

ROSALIA: Cadillacs zoom in America

TERESITA: Industry boom in America

BOYS: Twelve in a room in America

アニタを筆頭にロザリア、テレジータなどの女性陣が、アメリカのすばらしさを讃え、ベルナルド、インディオなどの男性軍が、水をさすような台詞でまぜっかえす。

しかし、この歌の根底にあるのは、「文明」の国アメリカへ移民して、様々な苦勞をしているプエルトリコ系移民だが、いくら故郷が懐かしくとも、この「自由の国」アメリカで、「アメリカン・ドリーム」を追い求めて生きるしかないこと。

いつも頼りにする Oxford American English Dictionary によると、“American Dream” とは：

American dream |ə'mɛrəkən drɪm| noun

the traditional social ideals of the US, such as equality, democracy, and material prosperity.

「平等」「民主主義」「物質的繁栄」そして「成功」。しかし、ウエスト・サイド物語から、半世紀以上がたって、このアメリカン・ドリームは実現どころか、悪夢に変わっているかに思える。

遅れる景気回復、高止まりする失業率、落ち込む消費、拡大する収入格差。

Prefer Blondes# (1953), White Christmas# (1954) など多くのミュージカル映画にダンサーとして出演; West Side Story# (舞台 1957; 映画 1961, アカデミー助演男優賞)で脚光を浴びた》[リーダーズ+プラス V2]

50 年前にアメリカ社会の最下層にいて、成功を夢見ていたプエルトリコ系移民は、未だに下層から這い上がっていない。プエルトリコ系を含むヒスパニック（ラティーノ）は、アメリカ社会全体で白人、黒人、アジア系より、年収も学歴も低く、出生率は高い。一方、彼らとともに最下層にイタリア人たちは、もう下層にはいない。人口が増え続けるラティーノ・グループの投票動向が、今年行われるアメリカ大統領選の鍵を握ると言われている。

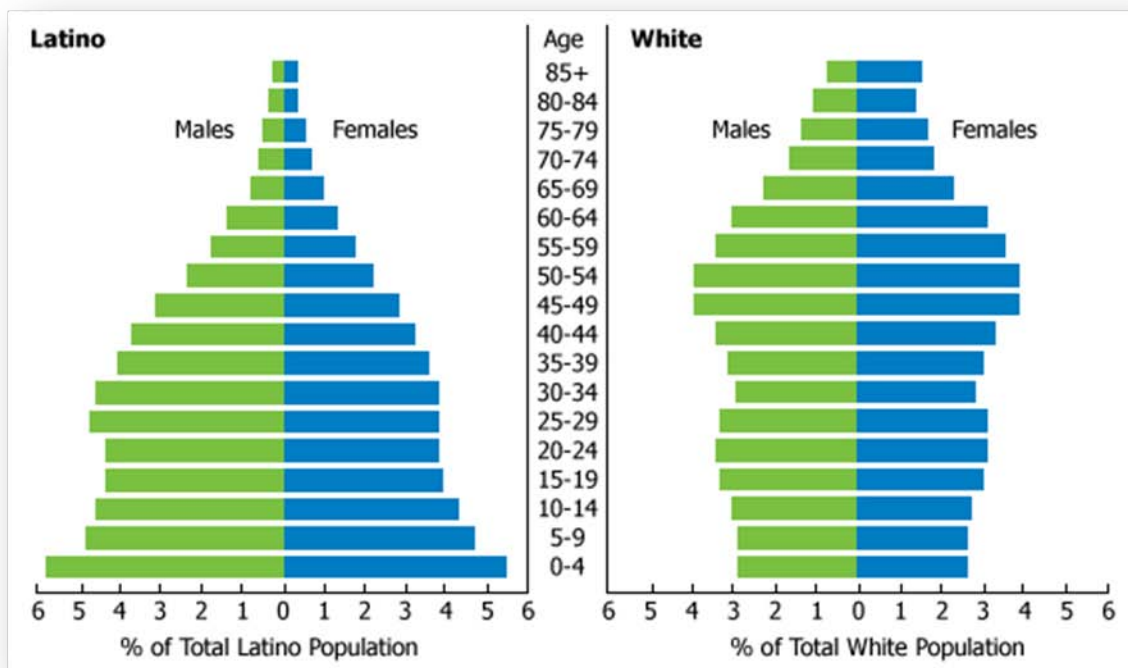


Figure 1. Age-Sex Pyramids for Latinos and Whites in the United States, 2009

ラティーノの人口ピラミッドを、白人の人口ピラミッドと比較するグラフである。ラティーノは0-4歳児の人口が多いにも関わらず、5歳以上19歳まで、次第に減っていく。栄養、医療などの問題か？25-40代の人口が多いのは、移民が多いからか。50歳以上で人口も少なくなるのは、医療保険の加入度が少ないからか？あるいは、故郷へ帰る？

数字だけを見ると、半世紀前にアニタ達が憧れたアメリカン・ドリームは、儚く消えてしまったように思える。アメリカン・ドリームの裏切り？

今年になって、アメリカでは、社会学者 Katherine Newman が書いた "The Accordion Family" と云う本が、話題になっているらしい。アコーディオン家族とは、何か？アメリカを含めて多くの先進国で、大学教育を終えた若者たちが続々と帰郷し、親の家に帰って一緒に住み始めているという。大学はでたけれど、仕事がなく自立できなくなっているのである。そういう若者を受け入れる家族を、必要に応じて大きく開くので「アコーディオン家族」、卒業後自立できずに帰郷する若者を「ブーメラン族」(Boomerang Kids)と呼ぶのである。



Larry Crowne

ここにも、アメリカン・ドリームの裏切り？が見られる。日本ではもともと社会的に、子供の「自立」にそれほど重きをおいてこなかったため、大学の授業料も親がかりだし、卒業後家においても、それほど問題にされることはない。しかし、アメリカ社会は、**Independence** をスローガンとする社会。イギリスからの独立でこの国は始まったのである。そのアメリカで、評価の高い大学をちゃんと勉強して卒業しても、学生ローンを返金しつつ、自活できる収入が得られる仕事をみつけることができない。アメリカの理念が崩れていく。

最近観た映画「Larry Crowne」では、スーパーマーケットのベテラン社員である Tom Hanks 演じる主人公は、真面目に仕事をする感心な社員なのだが、高卒で大学教育を受けたことがないことを理由に解雇される。そこから一念発起、Community College に通い始める。アメリカの Community College で教える友人は、不況になると、College は仕事を失った社会人でごった返して困ると云っていたが、この映画をみるとその間の事情がよくわかる。

しかし、こうした「学歴信仰」も、長引く不況とともに、崩れ去っていくのかも知れない。



*Change- Yes, We Can.*⁷

4 年前、「変化」を叫んで大統領に就任したオバマが、選挙の年を迎えた。民主党に対する共和党の候補は、Mitt Romney⁸と決まった。

オバマ大統領が、アメリカン・ドリームを再生できるのか？ロムニー候補の、新しいアメリカ・ドリームが、信任を得るのか？

アメリカはまた「変化の年」を迎えている。この変化に注目したい。アメリカがどのように、新たな文明の基軸を打ち立て、「便利で」「イカす」アメリカとして、再登場する姿を見守りたい。

戦後 75 年を経て、世界は「新たなアメリカ」が必要な時代になっているのかも知れない。(9 June 2012)

⁷ <http://www.5forcesofchange.com/wp-content/uploads/2010/07/Article-2-Obama-change.jpg>

⁸ Willard Mitt Romney is an American businessman and the presumptive nominee of the Republican Party for President of the United States in the 2012 election. He was the 70th Governor of Massachusetts.

Wikipedia Born: March 12, 1947 (age 65), Detroit

<http://www.google.com/search?client=safari&rls=en&q=mitte+romney&ie=UTF-8&oe=UTF-8>

つながる世界

塚本美紀

先月、たまたま仕事上で出会ったカナダ人の男性と話していた。彼は、バンクーバー・アイランドにある大学の職員で、現在はインチョンにある東アジア事務所で働いているという。留学を奨めるために東アジアの国々の大学を行き来していて、私の大学にも毎年この時期に来るようだ。話していると、彼がかつて北九州市で ALT をしていたということがわかり、何人かの名前をあげていくと、私の友人とはよく一緒に授業をして、仲が良かったということがわかった。「彼とは最近話してないなあ。今度会ったら、よろしく伝えておいて。」と言われたが、彼に会う予定もないので、その場で彼に電話をし、そのカナダ人にかわると、互いの近況などしばらく話していた。

そういえばバンクーバー・アイランドには、かつて一緒に働いていた ALT が大学の ESL のコースで教えているということ思い出したので、彼女のことを知っているかと尋ねると、知らないという。ところが、もう一人のカナダ人が、「あ、D.H.さんのこと？だったら知ってるわよ。私の大学じゃないけど、まあこの業界は狭いからね、何度か会ったことあるわ。」と言う。あまりの偶然に驚いた。しかし、しばらくして私は思った。これは偶然というよりも、共通の興味・関心を持っていたり、いろいろな属性が近い人たちは、物理的な距離を超えてどんどんつながりつつあることの現れではないのかと。

飛行機のお陰で、さらに最近は LCC のお陰で、仕事に観光にと、国境を越えることはますます簡単になっている。携帯電話は、いつでもどこでもある特定の個人につながろうとすることができる。facebook などの SNS は、継続的に多くの人との繋がりを保つことができる。とはいえ、「世界」がつながることができるのは英語のお陰で、英語がなければ、つながる範囲はぐっと狭まる。大きく世界が変わろうとする今、若者たちがどんな未来を作ることができるのか、あるいはどんな社会に属することになるのか、英語教師の担う役割は大きいのかもしれない。

編集後記：「教科書支援プロジェクト」に加え、「リスニング教材支援プロジェクト」が始まる。資金集めの成功にも会員それぞれの人とのつながりが鍵となりそうだ。(岡田)